

第十章 首都キープ

速度を落とした特急イリ・ライナーが特急ウク・ライナーとすれ違う。そして首都キープ駅に一番ホームに到着する。ドアが開いてイリと長老がホームに降り立つと目の前にひげ面の男が恭しく頭を下げて出迎える。

「イリ女王様。ご訪問ありがとうございます」

不意を突かれたイリはその男をまじまじと見つめる。頭を上げて厚い胸を張ると魅力的な低い声を出す。

「私はウクライナー共和国の大統領ダレデモスキーです」

「わあ！ かつこいい。サイン貰っていいですか」

長老が割って入る。

「イリ様！ 威厳を忘れずに」

ダレデモスキー大統領が手を差し出してイリの手を軽く握ると膝を折って頭を下げる。

「新型コロナウイルスのワクチンや医療機器の提供ありがとうございます」

「えっ？」

振り返ると特急イリ・ライナーから様々な積み荷が降ろされている。貨物列車ではないので

迅速に下ろせないが、それでも新型イリ・ライナーの中間車両の中央部が大きく開口して次々とホームに荷物が山積みされる。不思議がるイリに長老がささやく。

「行政府長官の指示です。彼は結構手回しがいいのです」

イリは大統領に頭を上げるような身振りする。

「私の指示ではなくイリライナー国民の意思です。遠慮せずにお受け取りください。それに偉そうに言うほどの量ではありません。ごめんなさい」

大統領の目に見る見るうちに涙が溢れる。思わずイリはハンカチを手渡す。大統領を警護する、と言っても数人程度の側近だが、誰もが目を潤ませる。それだけではない。駅にいるウクライナー人はもちろん各国から取材に来たプレス関係者も同じだ。そしてその中にはソシアのメディア関係者もいた。

この光景は文字通り地球を光のように駆け巡った。

*

破竹の勢いで首都キープに迫るソシア軍は周辺の村や集落の民家に押し入り金目の物はもちろんだ日用品特に家電製品を略奪する。少しでも抵抗すると殺害される。このままでは首都陥落は時間の問題だった。

キープ駅で大統領に別れを告げようとしたときにソシア軍の砲撃が始まる。駅周辺の建物が次々と破壊されるが、不思議なことに駅舎は無事で列車にも被害はない。それどころか各列車

は定刻に到着し発車する。

イリが武装した側近の銃に手をかける。

「貸してください」

前代未聞の言葉に力が抜けたのか側近は魔法にかかったように銃を渡す。

「爺や！ 行くわよ！」

てつきり長老が止めに入るだろうと大統領はもちろん周りの者すべてがそう思ったとき、長老も側近から銃をもぎ取ってイリの後を追う。なんと二人で戦うとするのだ。これを見た大統領が叫ぶ。

「行くぞ！ 死ぬまで戦う」

イリの一声が火をつけた。理不尽な相手には突撃しかない。イリはプチレンコンを遙かに凌ぐ独裁者的な性格を持っていた。あの細い身体のどこに力があるのか。誰もが思うだろうがこの場に居合わせたウクライナ人や各国のプレス人の印象は違う。イリが進撃をいとわない巨人に見えたのだ。

この態の急変に慌てたのは地球の遙か上空の宇宙戦艦で待機していた榊と加藤だった。

「やりすぎだ！ 感情に流されている」

榊が叫ぶと加藤が低い声を出す。

「いや、気持ちちは分かる。やり方もうまい」

榊がにらむが加藤は動じない。

「ここは静観しよう。我々が出る幕ではない。この程度の争いなど大したことはない」

「だが罪もない者が次々と死んでいく」

「それはウクライナの国民や兵士だけではない。ソシアの大統領に逆らえないソシア兵もだ」

「確かに。だがこのままではイリが……」

「大丈夫だ。イリに万が一のことが起こるのならノロが黙ってみていない」

とりあえず榊が納得の表情に変える。しばらくして加藤に問いかける。

「ノロは本当に黙っているだけなんだろうか」

今度は加藤が黙る。うつむいたり目を閉じたり開いたり、そしてかなりの時間をおいて応える。

「多分何とかするだろう。今までだつてそうだったじゃないか」

榊はただ頷く。だが同じく時間をおいて言葉をおく。

「悪いがハヤブサ戦闘機隊の臨戦態勢の準備だけは……」

今度は加藤が一回だけ頷く。

*

ウクライナ国民の士気は高い。当初はあおり戦争にただ驚くだけでなすすべがなかった。しばらくすると怒りがこみ上げてきて大統領の下に一気に全国民が結束する。

「取られたモノは取り返す。泥棒は追い出す！」

一方ソシアの大統領プチレンコンが軍や国民にいくら大義を説いても心底信じる者は少ない。

「ナチズムに汚染されたダレデモスキー大統領からウクライナー国民を解放する」

戦地に赴けばそのウクライナー人を相手に戦う。余程ウクライナーの大統領を悪の化身に仕立てなければソシア軍の攻撃力を維持できない。

しかし、ダレデモスキーは元役者だ。政治家としての経験は皆無だったが政治家を演じる力は政治家以上だった。そこをソシアのプチレンコン大統領は気付かなかった。

独裁者は自分以外の人間を自分以下だと思っている。最強のゼネラリストだと自負するから、様々な分野で活躍するスペシャリストを軽く扱う。しかも世界はグローバル化している。情報を遮断しようにも情報は湯水のごとく漏れる。情報をないものにしようと遮断するが、消去は困難で結果として隠蔽となる。隠蔽から嘘がにじみ出し、戦争で言えば士気の低下を招く。

真実を隠さず正確に様々なメディアを通じて伝えれば国民の意思を結束できる。しかし、伝達手段を一本化して都合の悪いことを伝えなくすると国民は表面上従うが、士気は上がるどころか離反する。指揮命令系統がしっかりしていても兵士は戦闘したふりをするだけで略奪に奔走することになる。

様々な情報を流して意見を集約するには時間がかかるが、結束するとその士気は高まりそれ

こそ指揮命令を着実に実行するどころか兵士はもちろん市民までもが臨機応変に対応する。その差は大きい。

*

イリはつぶさにダレデモスキー大統領の行動言動を観察する。ノロとはまったく違うタイプだと感心する。

「できる限りのことをします」

イリは首都キープの駅に戻ると大統領が自制を促す。

「今戻るのには危険すぎます。マリンポリン駅がソシア軍に包囲されました」

「だから行くのです。医師や看護師、それに医薬品の輸送にイリ・ライナーが必要です。それ以外にも目的があります。特急イリ・ライナーは超特急ユーロ・ライナーやウク・ライナーには及びません。でも私の国では数々の特急列車を製造しています。その特急列車に運行指示を出すのがこの特急イリ・ライナーなのです」

イリがダレデモスキー大統領に微笑む。

「またお会いしましょう」